

今日の説教のポイント<ヨハネによる福音書 19 章 28～30 節>

①ヨハネは、起こった出来事の「意味」を伝えようとした

聖書には、イエス・キリストの生涯を記した書が4つあります。そのうち最も古いものが紀元70年前後に書かれたマルコによる福音書であり、最も新しいものが紀元100年頃に書かれたヨハネによる福音書です。4つ目のヨハネ福音書は、他の3つよりイエス様の出来事の「意味」を伝えようとした福音書、と言えます。今日の箇所で「成し遂げられた」(28, 30)「実現した」(28)という表現が出て来ることなどにそれが現れています。元の出来事をできるだけそのまま記そうとしたマルコによる福音書15章33～41節と比べると、その違いがはっきり分ります。

②ヨハネは、旧約聖書からキリストの出来事の「意味」を考えている

ヨハネは、一体何について「成就した、完成した」と言っているのでしょうか？ それははっきりしています。彼は旧約聖書に記された内容を考えているのです。十字架の上で息を引き取られる直前に喉が渴かされたことについては、詩編22編を見るとよく分かります。「私の神よ、私の神よ、なぜ私をお見捨てになるのか」(2)という言葉から始まるこの詩編は、実は、その後半に至って、「(それでもなお)、私は兄弟たちに御名を語り伝え、集会の中であなたを讃美します」(23)と語り出し、神様への信頼を貫き通すことを語って終わる詩編なのです。この詩編の16節に、「口は渴いて素焼きのかけらとなり、舌は上あごにはり付く」と喉の渴きが描かれているのです。ですから、イエス様が父なる神様を疑って「我が神、我が神、何故我を見捨て給うのか」と言われたのではなく、「そういう状態に置かれても、なお、あなたに信頼し続けます」という詩編22編全体を十字架の上で叫ばれたのです！

③出来事は、それが持つ意味を知る時、その出来事の見方も変わる

キリストの死と復活、それはこの世界とそこに生きる被造物全て、すなわち私たちをも造られた神様が起された出来事です。このような出来事は、自分の頭で理解しようとする前に、それが持つ意味、神様がそこに込められた意味を考えることから始めるべき出来事です。そこに込められた深い恵みの意味が分かって来る中で、それを受け入れて生きようとする思いが私たちの中に芽生えて来る。それが信仰です。